

シンポジウム

リカバリー志向サービスへの転換

～当事者参加による支援サービスの意思決定～

シンポジスト：原田幾世（ピアサポーターをつくる会代表・仙台市精神保健福祉審議会委員）
小川瑛子（公益財団法人住吉偕成会住吉病院 医療相談地域連携室 精神保健福祉士）
中谷真樹（公益財団法人住吉偕成会住吉病院 院長・医師）
浅野克己（横浜市立大学IMR 参加者）
加藤大慈（横浜市立大学附属病院精神科 医師）
福田正人（群馬大学大学院 医学系研究科 神経精神医学 教授）
指定発言：向谷地宣明（浦河べてるの家・べてぶくろ・ひだクリニック）
座長：大島巖（日本社会事業大学）
相川章子（聖学院大学）

「変化のきっかけ 全ては【出会い】と【チャレンジ】」・・・原田幾世

「ピアサポートという関係」・・・小川瑛子・中谷真樹

「自分が感じた精神保健医療福祉サービスの現状」・・・浅野克己

「IMR (Illness Management and Recovery : 疾病管理とリカバリー)」・・・加藤大慈

「どんなスタッフにもできるリカバリー志向サービスのために」・・・福田正人

「リカバリー全国フォーラム」が一貫して目指している「リカバリー志向サービスへの転換」について、「当事者参加」というキーワードをたどりながら 6 名のシンポジストよりお話をいただきました。シンポジストの構成として、SDM や IMR など身近な診察場面等の実践(マイクロレベル)から、審議会等における施策決定(マクロレベル)までそれぞれのご経験からご発言頂きました。

原田幾世さんは、『出会い』と『チャレンジ』のなかで当事者としての経験を生かして、宮城県や仙台市の審議会等に当事者として参画されるようになったプロセスについてお話されました。入院中に仲間が制度や社会資源について教えてもらったことを原点に、その後仲間同士のグループづくりを始めていきます。そのなかで「宮城県障害者施策推進協議会」や「仙台市精神保健福祉審議会」へ推薦され、不安もありながらもチャレンジし、自分の立場で質問したり発現することを学んでいったと話されました。委員のなかで当事者は少なく、いかに当事者の声を施策に届けていくかはこれからの課題だと話されました。『出会い』と『チャレンジ』の気持ちを大切に仲間とともに歩んでいきたいと力強く締めくくられました。

二組目は中谷真樹さん、小川瑛子さんで、はじめに中谷さんより「ピア」とは、関係性を表す言葉であることをボート競技を例に説明されました。その後互いに「なかちゃん」「えいちゃん」と呼び合いながら対談形式ですすめられていきました。小川さんはピアスタッフとして雇用されて 3 年目、「えいちゃんを雇用したのは情熱があったから」と話されました。「えいちゃんの強みは？」「私はピアノが弾けて、マンドリンができて、書道得意、剣道 2 段、手芸が得意、手先が器用・・・」「他にも未だあるよ」と、病気や障害は小川さんの一部であることが紹介されました。今年に入って 3 回入院されたことを話すと、実は中谷さんも困っていたと話されました。クライシスの時に仲間として互いにサポートするプランを作

っておくことの大切さを話されました。

三組目は、IMR に取り組まれている医師の加藤さんと、IMR 利用者の浅野さんの発表です。加藤さんより IMR とはなにか、構成や枠組みについて説明された上で、パターナリスティックな疾病教育と IMR の比較を示し、最終的な決定は本人であることがポイントであることを強調されました。浅野さんからは断薬の後の再発からリカバリーしたプロセスを語られ、そのなかで IMR の協働意思決定が自分のリカバリーにどのような役割を果たされたのかについて経験をもとに説明されました。IMR を選んだことをはじめ全て自分が選択したことがリカバリーにつながったと話されました。最後にいろいろな選択肢を知ってほしい、選択肢を知ることがリカバリーにつながると会場へメッセージを送られました。

四組目は、福田さんからは、はじめにリカバリーとは一番遠いところにいる精神科医かもしれないと自己紹介をされ、誰にでもリカバリー志向サービスはできるんだということについて話されました。多くのご家族や当事者の方が発しているメッセージを多く引用されて、多くを学んだことを強調されました。病気を治すことは提供者側にとっては目的でも当事者にとっては手段に過ぎず、医療チームの中心は患者さんであり、治すのは本人であると話されました。生活と脳がつながるものとして行動脳という考え方を紹介され、人間が行動の主体となることであり、当事者の価値に基づいた精神科医療の実現が協働意思決定の実現につながるのではないかと提案されました。

指定発言として、べてぶくろの向谷地さん、伊藤さん、坂井さん、そして記念講演講師アーミー・マウラさんの 2 組 4 名よりいただきました。

向谷地さんからは、「べてるの家」の実践、特に当事者研究を通して、自分らしい生き方へ旅路、主導権を取り戻すということの意義について、「なめらか」につながっていくことの大切さを説明されました。伊藤さんや坂井さんからは当事者研究によってリカバリーしていった経験について語られました。

マウラさんからは、日本は恵まれているという感想が述べられた上で、シンポジストひとりずつの経験が世界を変えていくエネルギーが漲っていくと励まされました。

シンポジウム全体として、自分らしい生き方を追い求め、旅路に出て行くという時に、辛いことや勇気が必要であることが当事者の方からは述べられつつも、しかしなおも主導権をどう取り戻していくかということが重要であり、その具体的な方法としてのリカバリーコーチ、IMR や SDM、当事者研究などによる協働意思決定へ向けたチャレンジの途にあるという現状が共有されました。そのうえで、協働意思決定へ向けた未来に向けて、シンポジストをはじめ会場の皆様とともに考えることのできた有意義な時間となったのではないかと思います。

《相川章子（聖学院大学）》